

# 令和3年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：後志地区
- 2 事例報告学校名：赤井川村立赤井川小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 半田 健一
- 4 キーワード：学校の地域貢献

## 1 はじめに

赤井川村は四方を山々に囲まれた盆地に広がる、人口1,000人ほどの村である。昼夜の寒暖差は、米や果菜類など付加価値の高い農作物を育むと同時に、秋の晴れた朝には村全体が雲海の底に沈む特徴的な風景をつくり出す。近年、ウインタースポーツだけでなく、グリーンシーズンにもカヌーやパラグライダーなどの愛好家が多く訪れ、体験型観光による地域活性化にも期待が高まっている。

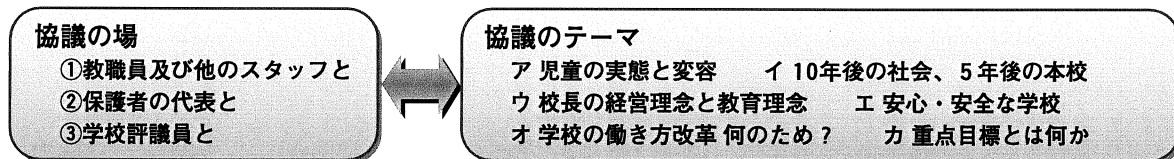
本校は、明治32年に開校。「郷土の夢を教育に託す」とした先人の思いは連綿と受け継がれ、恵まれた教育環境の中、各界で活躍する人材を輩出してきた。現在は複式学級を含む4学級児童数39名の小規模校である。昨年度より、地域と共にある学校の姿として、「存在価値が認められる学校」「保護者・地域と共に子どもの成長を喜び合える学校」「地域と関わり、地域を知り、地域を愛する子が育つ学校」の3つを掲げ、教育活動の改善・充実に取り組んでいる。

本稿では、その一端として子どもの育成を通じた「学校の地域貢献」に視点を当てて紹介する。

## 2 具体的な取組

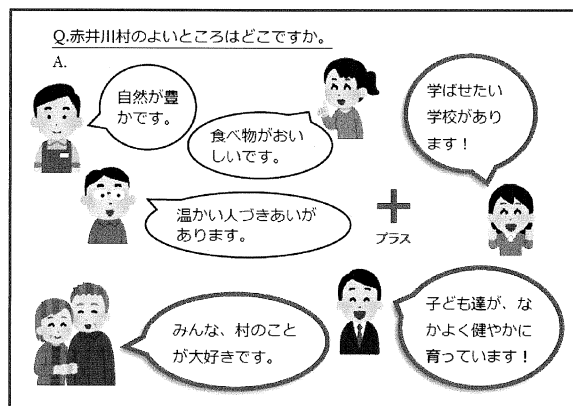
### (1) 「地域貢献」への意識化

#### ① 協議を通じたビジョンと方策の共有



学校教育の目標と「地域貢献」とは直接的には結び付きにくい。しかし、未来の村の姿を想像し、その実現を「共に目指す目標」とすることでそれは明らかにされる。そのために令和2年度内から、上記のように複数回に渡る協議の場を設けた。協議を踏まえて、学校の役割と、それを果たすための方策を明記した学校経営方針を示し、学校運営協議会での承認を得た。

方策の一つとして、地域のよさを自分で探し、見付けていく過程で、社会と向き合い、地域課題を認識し、解決していこうとする社会体験的な学びの充実を挙げた。



協議を通して共有した目指す赤井川村の姿

#### ② 学校の取組と地域の姿

学校の取組が地域貢献にもつながることを明確にするために、各重点的取組のゴールとその先にある地域の姿をセットにして示し、共有している。そのことが学校の取組に対する、地域の方々の協働的な関わりを生み、適切に評価していただける環境をつくっている。

	令和3年度前期のゴール ※抜粋	地域の姿
徳	中学生とも挨拶を交わしている 言葉のキャッチボール2往復	明るく、温かい校区の実現
知	残り3分すべての教室でふり返っている 自学ノート達成率9割	可能性を広げる9年間の教育環境
体	学校における感染症の拡大ゼロ	コロナ禍でも安心・安全な村

## (2) 総合的な学習の時間の再構成

### ① 令和2年度の取組

本校では地域と児童の学習を結びつける教育活動の一つとして、ふるさとの自然や暮らし、文化などを教材とした総合的な学習の時間の計画を作成・実践してきたが、当該年度に「北海道ふるさと観光教育実践指定校」となったことを機に、更なる充実改善に取り組んだ。

初年度は中学校との接続単元となる6学年の計画を次の点から改善した。

- 5学年までの学習を多面的・統合的に捉える。
- ふるさとの魅力や課題を認識し、自ら取り組めることを考える。
- 表現する目的や対象を広げながら、豊かな表現力を身に付ける。

新しい計画に基づき、村内在住の写真愛好家を講師とした写真教室、各所での取材・撮影活動を経て開催した写真展は、校内だけでなく、村内施設で移動展示された。また、村の広報誌でも3か月に渡り紹介され、児童が作成したアンケートを通じて称賛の声が数多く寄せられたことで、人と深く関わりながら、自己有用感を高める学びとなった。

**単元構想**

ふるさを大切にす  
る気持ちを持つ。(特別  
の教科道徳:「郷土愛」)

造形的な視点を生かして  
表現を創造、工夫する。(図  
画工作科の見・考)

地域の地理的特徴を地形  
や位置関係、交通、産業など  
と関連づけて探究する。(社  
会科の見・考)

自然の事物・現象を時間的・空間  
的な視点で捉え、生活との関わり  
で考える。(理科の目標、見・考)

目的や相手に応  
じた言語表現を用  
いる。(国語科の目  
標、見・考)

- ・記録、質問、中心  
を捉えて聞く。
- ・紙や空間に合わ  
せて書く。
- ・適切に情報を扱  
う。(国語科の内容)

**写真展を開催しよう**

- ・ふるさとの魅力再認識
- ・課題への気づき
- ・表現の創造・工夫
- ・多様性の尊重
- ・相手意識、場所意識

その他

### ② 令和3年度の取組

更に、プロジェクト型学習の中で個別の学習を充実させ、主体的な課題解決と表現活動を実現していくために、児童基点の発想で村のPR活動に挑戦させた。

児童は、新たに体験型観光事業所の取材、村内陶芸家を講師とした陶芸体験等も行い、QRコードの活用や情報発信のルールも学びながらPRパンフレットを完成させた。

パンフレットは他町の大型商業施設前で配付し、赤井川村商工会や農家の方々のご協力で、地元の農産物もPR配付させていただいた。社会とふれあ

う貴重な体験学習を通して、児童アンケート「赤井川村の環境や歴史・産業に関心がありますか。」の問いに「ある」と答えた児童の割合は、事前50%から事後100%となった。



## 3 成果と課題

教育課程において、子ども、学校、地域の課題を関連させることで、「学校の地域貢献」の在り方の一つを示すことができた。子どもが地域を、学校が子どもの活動をPRすることで、共有した目標への見通しが徐々に可視化され、学校からの働きかけには、常にプラスαの協力をいただいている。

課題として、地域との窓口として期待する学校運営協議会自体の動きはまだ見えにくく、制度のよさを職員が実感できる状況に至っていないことが挙げられるが、確かな実践を重ね、子どもが成長することで、地域へPRされ、地域からPRされる学校になっていくことができるものと考えている。

